

## 巻 頭 言



## ポストコロナの感染症研究

長崎大学感染症研究出島特区・特区長

森 田 公 一

Kouichi MORITA

長崎大学は江戸幕末オランダ人医師による長崎医学伝習所の開設に始まる。当時の日本で流行した重篤な感染症のほとんどが長崎の出島を通して外来性にもたらされ、同様に世界初のワクチン：種痘も長崎から全国に普及した。またフィラリア症などの濃厚流行地域であった離島が多い地域特性により長崎大学にとって感染症は長く最重要の教育・研究課題であり、感染症研究・人材育成分野で特色ある発展を遂げてきた。現在ではBSL-4施設も有し、5つの部局で160名以上の研究者が感染症にかかわる教育・研究を行っており、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）についても東京医科大学を始め、学外の多数の研究機関と共同研究を実施している。

現在、日本ではCOVID-19の第7波の真ただ中であり、出口が見通せない状況にも思えるが、諸外国の状況を眺めるとワクチンだけでなく自然感染による獲得免疫も加わり流行が落ちつきをみせ、徐々に通常の生活に戻りつつある地域も散見できる。医療も医学研究も社会生活もポストコロナの在り方を真剣に検討する時期にきた。COVID-19に限らず、昨今の新興・再興感染症の増大がグローバル化に伴う複合的な要因によることを考えると、我々は今後も新しい感染症のパンデミックへの備えを抜きにしてポストコロナを語ることはできない。

未知の感染症を含む様々な感染症に対応するためには理にかなった研究・人材育成体制、社会システムの整備が必須である。感染症領域においては、国内にない感染症の海外での先回り研究の実施、研究施設の整備、感染症を治療する感染症専門医の充足等々、課題が山積している。感染症以外のあらゆる領域でもその議論を活性化し100年先かもしれない次のパンデミックに備えた維持可能な変革が求められる。

今回のパンデミックでは欧米諸国は迅速な対応により、ウイルス同定から1年以内に、抗ウイルス薬、抗体医薬品やmRNAワクチンを実用化して世界の対策に貢献しているが、我が国からは2年半が経過した今もワクチンが上市されていない。1980年代、日本がワクチンや抗生物質の研究で世界のトップを走っていた頃を知る者の一人として、忸怩たる思いである。2021年6月のG7サミットでは「100日ワクチン構想」が提唱された。通常の医薬品開発に必要な時間から考えるとありえない数字に思えるが、ハードルは高い方がよい。日本の感染症研究が後れを取ったことを素直に認め全国の、大学、研究機関、企業の総力を結集して復活の道を歩まねばならない。

## 略 歴

森田 公一（もりた こういち） MORITA, Kouichi

昭和31年6月5日生

## 現職名

長崎大学感染症研究出島特区・特区長（学長特別補佐）

長崎大学熱帯医学研究所・ウイルス学分野教授

## 学 歴

1981年 3月 長崎大学医学部卒業（医師）

1985年 3月 長崎大学大学院医学研究科修了（医学博士）

## 職 歴

1985年 4月 長崎大学熱帯医学研究所 助手

1985年 11月 米国ニュージャージー医科歯科大学 助手

1987年 11月 長崎大学熱帯医学研究所 助手

1989年 2月 長崎大学熱帯医学研究所 講師

1995年 5月 世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局感染症対策課課長

1998年 5月 長崎大学熱帯医学研究所 講師（復帰）

2001年 10月～現在 長崎大学熱帯医学研究所 教授

2001年 10月～現在 WHO 研究協力センター長

2009年 4月～2013年 3月 長崎大学熱帯医学研究所 副所長

2013年 4月～2017年 3月 長崎大学熱帯医学研究所 所長

2019年 4月～2022年 3月 長崎大学熱帯医学研究所 所長

2022年 4月～現在 長崎大学感染症研究出島特区 特区長（学長特別補佐）

## 受賞歴

2013年 10月 熱帯医学会賞

## 専門分野

熱帯性ウイルス感染症、新興ウイルス感染症の疫学、診断、治療、予防

## 所属学会

日本熱帯医学会、日本ウイルス学会、日本臨床ウイルス学会、日本感染症学会、日本バイオセーフティ学会